様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２４５４

研究課題名（和文）トランスナショナルな視座からの済州(チェジュ）四・三文学の解明

研究課題名（英文）Explication of Jeju's April 3rd Texts in Transnational Perspective

研究代表者
姜　信和（KANG, Sinhwa）

名古屋大学・人文学研究科・研究員

研究者番号：５０７２５０８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、済州島四・三事件（1948）にまつわる四・三文学をトランスナショナルな観点から再読し、大量虐殺をめぐる記憶と表象の問題の相対化を目指した。
　第一に東アジア（日本・大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国）における諸言説、第二に両極的な左右イデオロギー対立の局面、第三に第二次大戦後の「民主的」民族解放論に依拠して権威づけられた表象－これらはすべて犠牲者を弔おうとするがために、むしろその代表に成り代わるという空虚な罠に陥っている。したがって本研究はこれらの再検討を行い、それを通してテクスト字面どおりの文学的闘争の実態を解明することに寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、韓国の民族主義や「在日」の民族解放運動論に基づいた、現在の史観による表象を分析して、四・三文学が抱え持つイデオロギー性の限界の輪郭を提示した。併せて虐殺の現場における被害と加害の複雑な実態を明らかにした点で、学術的に意義がある。また日・韓・共和国、三国の歴史認識における「国民国家」間の葛藤など、アクチュアルな問題に接続しており文学領域外の研究にも貢献し得る点で、社会的に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted to relativize the issue of memories and representations concerning the Jeju massacre in 1948 by reviewing Jeju’s April 3rd Texts in transnational perspective.
 It has contributed to reveal literal struggles in the texts through reobservation of not only on the discourses in East Asia, especially Japan, Republic of Korea and Democratic People’s Republic of Korea, but also bipolar aspects such as left and right ideologies and representations authorized on the discussion of “democratic” ethnic liberation after World War II, which has made themselves entrapped into the emptiness, that is, to be representatives for mourning of the victims.

研究分野：人文学

キーワード：済州島四・三事件　四・三文学　在日文学　民族主義　トランスナショナル　日本・大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国

１．研究開始当初の背景

報告者はこれまで、歴史的・社会的文脈に基づき構成されてきた民族的な抵抗詩人としての尹東柱像を、尹東柱（1917～1945）のテクストそれ自体を読み直すことで相対化してきた（博士論文「尹東柱の脱神話化－トランスナショナルな視座からの再読」2013）。過去の植民地支配の記憶は被害者側と加害者側の双方にとって重いものであり、かつての被害者側はありのままの過去を凝視するのではなく世襲的犠牲者意識（heriditary victimhood）（Z. Bauman）に囚われがちで、それによって呼び覚まされる不毛な「憎悪」を無検証に増幅する傾向にある。一方で、かつての加害者側は集合的な有罪意識（collective guilt）（H. Arendt）の傘下に自ら入り込み、集団の中に個々人の罪や責任を包摂させることで曖昧な贖罪意識による「善意」を無自覚に披瀝するきらいがある。現にその特徴の一例として、植民地期の犠牲者である尹東柱は日韓で偶像化されているのだが、トランスナショナルな観点から尹東柱の脱神話化を図ってテクストを字面どおり（literally）に再読すると、これらの言説は構造上、結果的な民族主義（consequential nationalism）に陥っていることが明らかになった。本研究はその延長線上で、同一の地平からの再読が不可欠な四・三文学に焦点を当てた。

なぜならば、事件当時の国際関係を見ると、第二次大戦末期に本土防衛の最終決戦場として済州島に 8 万 4 千人（文京洙『済州島四・三事件－「島（タムナ）のくに」の死と再生の物語』2008：254）の兵を投入した日本、大戦後は東西イデオロギー対立を背景に米ソによる分割占領の結果、南半部の統治権を譲り受けた米軍政、建国の過程にあった韓国政府、民族解放と統一の名目で軍事蜂起を準備していた共和国、大虐殺はこれらの絡み合いの中で起きている。そして、この武力鎮圧による虐殺の実態が韓国政府の正統性に疑義をもたらしかねないため、専制支配下の韓国において長らく言論弾圧が続いた。その間、真相究明が果たされないばかりか、事件は共産主義暴徒の反乱と断定されてきたのだが、犠牲者家族らの努力と民主化運動があいまって、ようやく事件は「国家犯罪」と認定（「四・三特別法」2000）された。しかし、島民への謝罪と犠牲者の名誉回復がなされ一定の政治的収拾に至ってもなお、韓国の民主化運動や「在日」の民族解放運動との関連における事件の歴史的評価について議論が再燃しており、遺骨発掘を含めた追加調査も続行中である。

このように四・三事件は、いまだに人々を縛り付け、対立・争闘に駆り立てるイシューであり、その性格上、イデオロギー対立に常に翻弄され引き裂かれてきた四・三文学ならびにその研究も、これを乗り越えるための新しい観点から解明しなければならないと考えた。以上の理由により、新たにトランスナショナルな視座から本研究の開始に至った。

２．研究の目的

沈黙を強いられていた時代、報道機関よりもいち早く事件を告発する結果となり、韓国内で真相究明運動の一翼を担ったのは文学的表象であった。この運動に火をつけた画期的な作品が、玄基榮の「順伊（スニ）おばさん」（1978）である。そのために著者は逮捕され作品も禁書になるが、一方でこの弾圧によって、彼の作家としての地位が堅固なものになったことも否定できない。そして、この禁書が韓国から日本に持ち出され翻訳されて、日本における四・三理解の基本的書物となった。その後、こうした日本内の四・三理解が韓国の民主化運動の隊列に持ち込まれ、韓国内の民主化運動に伴った日韓連帯の市民運動に通底する、四・三理解の基盤が形成された。さらに事件の渦中で島を脱出した人々が、厳しい韓国の独裁支配と比べて相対的に自由な日本で、経験を「証言」した。引いてはそれらの証言に依拠した在日の金石範の「火山島」、日本に逃亡した経験を基底にした金時鐘の詩作なども、韓国における四・三理解に影響を及ぼした。つまり韓国と日本の四・三文学の相互関連は明らかで、言わば国境を越えた共闘が社会運動として一定の成果を上げたことは揺るがしようのない事実である。しかし他方、事件に関する情報が限られていた上に、「民主的」民族解放運動論に依拠した在日の民族運動の理念に基づく日本発の四・三文学に、一定の偏向があり得ることは十二分に理解できる。在日作品の限界、とりわけイデオロギー性というバイアスが、韓国の表象に与えた影響は長所ばかりとは言えまい。以上が本研究の核心をなす学術的な問いであった。

すなわち時代ごとに変化する支配的な各国の諸言説、「正史」をめぐり人民蜂起としての「抗争」か、はたまた共産主義者による「暴動」かといった具合に、相手側の歴史認識こそが「歪曲」であるとしていまだにイデオロギー的「立場」から左右両極に分裂する論争、四・三事件は被抑圧民衆が帝国主義と闘った民族解放闘争であり「祖国統一のための愛国闘争」であったとする史観に則った表象、以上の三点の分析が作業の中心となった。これらは犠牲を記憶するという代理行為によって、かつての現場から乖離し島の現実を忘却するというアイロニカルな罠に陥っている。したがって本研究は、弔いと救いのためであったはずの表象を批判的に読み直し、これらの文学的闘争の実態を解明することを目的とした。

３．研究の方法

（１）　研究方法（概要）

１） 幼少の頃の悲劇体験を反芻しながら作家活動を継続してきた、二人の済州出身の現役作家、玄基榮（1941～）と玄吉彦（1940～）における四・三文学を分析し、両者を比較する。
２） 在日による民族解放運動論に基づいて、未経験ではあるが四・三事件を追い続け、作品化してきた金石範（1925～）と、悲劇の渦中から日本に逃亡した経験をもとに詩作を継続している金時鐘（1929～）の作品における四・三事件の捉え方およびその表象を分析し、両者を比較する。
３） １）２）の成果を踏まえつつ、共和国の人気ドラマの原作で「漢拏山」が象徴的モチーフとなっているヤン・イソン（1942～）の長編小説も加えて分析を試みる。
４） 日・韓・共和国、各国の政治・文化状況の中で産出された、それぞれの言説とその相関性について検証し、それを通して紛争に絡む文学的表象の複層的な構造を解明する。
５） 済州・大阪・釜山でフィールドワークを展開し、四・三事件の経験者ならびに犠牲者遺族へのインタビューを採取し、それらと既存の四・三にまつわる代表的な表象との照合を通じて差異を明らかにする。

（２） 研究の方向性

四・三文学についての総体的な先行研究（金東潤『四・三の真実と文学』2003、『記憶の現場と再現の言語』2006）を踏まえ、日本・韓国・朝鮮民主主義人民共和国を跨ぐトランスナショナルな空間に視点を拡げて四・三文学の相互関連に着目した。各自の主な分担箇所は以下のとおりである。また研究代表者、分担者ともにそれぞれのネットワークを生かして、犠牲の実態に密着するための現地調査にも注力した。

１） 姜　信和：同世代で、ともに四・三文学を主導してきた玄基榮と玄吉彦について、両者を比較対照して二人を取り巻いてきた政治状況との距離の取り方、イデオロギー性に関する様相と限界、現時点における文学的姿勢と表象の差異について検討し、それらと在日の作家たちとの相関性を分析した。
２） 玄　善允：在日文学の中でも傑出している金石範と金時鐘の文学活動と政治活動との関係、そのテクストや思想における在日としての可能性と限界、およびそれが両者の四・三事件にまつわる表象にもたらしたバイアスを析出し、それらと済州の作家たちの関係を分析した。

４．研究成果

（1） 済州の 4・3 犠牲者遺族会、ならびに済州 4・3 定立研究・遺族会の双方に対するインタビューなどの現地調査、大阪および釜山のフィールドワークを通して複数の証言を収集した結果、四・三事件に関して左右両極に分裂した言説間の葛藤がいまなお持続していることはもちろん、そうした支配的な言説に決して回収しきれない複雑で多様な実態が明らかになった。すなわち事件の経験から乖離した観念的な表象、政治的な言説の暴力が個的な証言をむしろ抑圧し、経験を語りにくくしていること、さらに声高に記憶を語る代理行為が時代ごとの支配的な言説に無自覚に同調する傾向を持つがゆえに、事件の実像をわかりにくくし、その時代の定型的な証言以外の語りを諦めさせる装置として機能してきたことを確認した（玄 2016)、(姜 2016、2019)。
（2） 玄基榮とともに四・三文学の代表作に挙げられる玄吉彦の『戦争ごっこ』および『島の反乱』の翻訳を刊行して、韓国において事件がいかに表象されているのか、これまで日本で紹介されてきた作品以外の書物にも日本語話者がたやすく接続できるようにした（玄 2015、2016)。さらに金石範の「火山島」の精緻な分析を通じて、事件の実態と在日による四・三表象との差異を析出し、その問題点を提示した（玄 2018)。
（3） 2000 年以降、大韓民国の公共圏における「過去清算」プロジェクトの理念を掲げた四・三文学の継承と発展のための教育事業が、国家的な平和事業として遂行されているが、そうした事業のはらむ問題点を、現地調査を通じて具体的に提示した。すなわち済州四・三平和文学賞、全国青少年四・三文芸公募（詩・散文・漫画部門）、済州四・三の歌公募、済州四・三平和賞などの新たな事業が、「正史」に沿った画一的な表象を頒布する啓蒙のメディアとして、政治的な役割を担っている一面を明らかにした（姜 2016）。
（4） 本研究の基盤をなす、トランスナショナルな観点から表象を再検討する方法論の実践として、民族的な抵抗詩人である尹東柱のテクストを読み直す研究会を、名古屋大学において持続的に主催し運営した。運営に際しては研究者のみならず一般市民にも門戸を開いた。併せて名古屋大学をはじめ愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知大学、南山大学など近隣大学の多数の学生を受け入れて、今後の研究、ならびに国際交流の発展に寄与する次世代の人材育成にも力を入れた(「별 헤는 모임 (星をかぞえる会)」、2016 年 8 月 28 日・10 月 30 日・12 月 18 日、2017 年 4 月 30 日・6 月 4 日・8 月 6

日・10 月 1 日・12 月 17 日、2018 年 2 月 25 日・4 月 29 日・7 月 8 日・8 月 12 日・10 月 7 日、2019 年 2 月 7 日、尹東柱研究会主催、名古屋大学東山キャンパス)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

１）姜信和「済州島四・三事件とふる里の村づくり－異郷に生きた男（サナイ）の面影を追う」、*Autres*、第 10 号、査読無、2019 年、53－67

２）玄善允「金石範著『火山島』の言語の＜異様さ＞について－表層からの『火山島』へのアプローチ－」、『東アジア研究』、第 69 号、査読有、2018 年、1－19

http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia/bulletin/pdf/asia_69.pdf

３）玄善允「金学鉄と尹東柱、二人の文学者の帰属と日本における受容の対比などについて」、『朝鮮族研究学会誌』、第 7 号、査読無、2017 年、47－61

４）姜信和「トランスナショナルな視座からの済州四・三文学の解明」、*Autres*、第 7 号、査読無、2016 年、81－92

５）玄善允「済州 4・3 事件に関する未体験世代の表象－済州での予備的インタビュー調査－」、『東アジア研究』、第 65 巻、査読無、2016 年、35－55

http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia/bulletin/pdf/asia_65.pdf

〔学会発表〕（計 15 件）

１）玄善允「金石範著『火山島』の言語の＜異様さ＞について」、青丘文庫月例研究会、2017 年 12 月 10 日、青丘文庫

２）姜信和「尹東柱と植民地の日常－詩世界と解放（分断）後の評価との差異をめぐって」、第 7 回研究集会第 5 パネル『脱＝植民地化の文学－敗戦／解放後の日本とコリアを事例として』（企画・廣瀬陽一）、2017 年 9 月 25 日、世界文学・語圏横断ネットワーク、同志社大学今出川キャンパス

３）玄善允「台湾の日本語作家黄霊芝と在日朝鮮人文学者との、日本語とその文学に対する考え方の対比」、アジアにおける多民族社会研究会、2017 年 4 月 23 日、大阪経済法科大学 OUEL 研究センター

４）姜信和「和解という名のファンタジー：玄基榮の「対話」についての一考察」、シンポジウム『済州島四・三事件の記憶をめぐる紛争と四・三文学』、済州四・三文学研究会、2017 年 3 月 15 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

５）高誠晩「虐殺の記録の読み解き方：済州四・三事件以後を生き抜くための窮余の策について」、シンポジウム『済州島四・三事件の記憶をめぐる紛争と四・三文学』、済州四・三文学研究会、2017 年 3 月 15 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

６）玄善允「『火山島』の一つの読み方：小説家、語り手、登場人物の関係をめぐって」、シンポジウム『済州島四・三事件の記憶をめぐる紛争と四・三文学』、済州四・三文学研究会、2017 年 3 月 15 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

７）文京洙「基調講演：四・三事件の二面性とイデオロギー化される記憶」、シンポジウム『済州島四・三事件の記憶をめぐる紛争と四・三文学』、済州四・三文学研究会、2017 年 3 月 15 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

８）玄善允「朝鮮族研究と金学鉄と尹東柱の位置づけについて－2016 年度全国大会における関連シンポの中間総括の試み」、朝鮮族研究学会、2017 年 2 月 26 日、立命館大学大阪茨木キャンパス

９）姜信和「玄基榮の語りの可能性と不可能性－「順伊（スニ）おばさん」を中心に」、シンポジウム『戦争（争い）における記憶と忘却のナラティヴ－和解に向けて』、日本比較文学会、2016 年 12 月 3 日、名古屋大学東山キャンパス

10）姜信和「尹東柱をめぐる研究状況」、朝鮮族研究学会、2016 年 10 月 2 日、日本大学経済学部

11）姜信和「犠牲者遺族会と定立研究遺族会の対立－傷痕と葛藤の行方－」、シンポジウム『トランスナショナルな空間における四・三史観の変遷－済州四・三文学との相関性の検討』、済州四・三文学研究会、2015 年 10 月 17 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

12）玄善允「済州の若い世代の四・三に関する経験と知識と考え－済州での予備的インタビュー調査結果－」、シンポジウム『トランスナショナルな空間における四・三史観の変遷－済州四・三文学との相関性の検討』、済州四・三文学研究会、2015 年 10 月 17 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

13）梁永厚「「在日」からみた済州四・三、そしてその見方の変遷」、シンポジウム『トランスナショナルな空間における四・三史観の変遷－済州四・三文学との相関性の検討』、済州四・三文学研究会、2015 年 10 月 17 日、立命館大学大阪梅田キャンパス

14）高誠晩「韓国と日本における済州四・三事件研究の動向と課題」、シンポジウム『済州四・三研究の現況とその文学的表象の位置』、済州四・三文学研究会、2015 年 6 月 13 日、立命館大学大阪茨木キャンパス

15）玄善允「玄吉彦の『四・三事件真相報告書』批判について－四・三把握と表象の多様性－」、

シンポジウム『済州四・三研究の現況とその文学的表象の位置』、済州四・三文学研究会、2015年6月13日、立命館大学大阪茨木キャンパス

〔図書〕（計4件）
１）李映権（著）、玄善允（訳）『済州歴史紀行』、同時代社、2018年、396p
２）玄善允『人生の同伴者－ある在日家族の精神史－』、同時代社、2017年、419p
３）玄吉彦（著）、玄善允（訳）『島の反乱』、同時代社、2016年、177p
４）玄吉彦（著）、玄善允・森本由起子（共訳）『戦争ごっこ』、岩波書店、2015年、276p

〔その他〕
エッセイ（計2件）
１）玄善允「巻頭エッセイ－第一回 済州の歴史と生活文化のフィールドワークを終えて」、『青丘文庫月報』、第294号、2019年、1－3
２）玄善允「ワークショップⅧ印象記－久しぶりの原爆文学研究会－」、『原爆文学研究会会報』、第48号、2015年、8－9

口頭発表（計10件）
１）姜信和「尹東柱における「倦怠」と「白」の多義性について」、尹東柱研究会、2019年2月7日、名古屋大学東山キャンパス
２）玄善允「『済州歴史紀行』（李映権著、ハンギョレ出版、2004年）の翻訳書（玄善允訳、同時代社、2018年11月）の刊行を契機に、58歳の手習い（済州学研究もどき）の10年を振り返る」、青丘文庫研究会、2019年1月13日、青丘文庫
３）姜信和「玄基榮の「順伊（スニ）おばさん」再読－済州の方言と風物に着目して」、済州四・三文学研究会、2018年10月7日、名古屋大学東山キャンパス
４）姜信和「信仰と不信仰の狭間－相関する「八福」、「慰労」、「病院」をめぐって」、尹東柱研究会、2018年10月7日、名古屋大学東山キャンパス
５）姜信和「評伝講読－尹東柱の幼少年期を中心に」、尹東柱研究会、2018年8月12日、名古屋大学東山キャンパス
６）姜信和「尹東柱の「肝」再読－間テクスト性を主軸に」、尹東柱研究会、2018年7月8日、名古屋大学東山キャンパス
７）姜信和「尹東柱の「白い影」、「いとしい追憶」、「流れる街」、「たやすく書かれた詩」講読－原詩と邦訳と英訳を見比べて」、尹東柱研究会、2018年4月29日、名古屋大学東山キャンパス
８）玄善允「南玉瓊著『第2のコリアン・ディアスポラ－中国朝鮮族の国内移動とコミュニティ形成』（創土社、2018年刊）に関する「門外漢の書評もどき」の呟き」、朝鮮族研究学会、2019年1月12日、立命館大学大阪茨木キャンパス
９）玄善允「中国朝鮮族をめぐる歴史と文学－二人の文学者に焦点を当てて」（企画・司会）、朝鮮族研究学会、2016年10月2日、日本大学経済学部
10）姜信和「研究趣旨－トランスナショナルな視座からの四・三文学の解明」（企画・司会）、『済州四・三研究の現況とその文学的表象の位置』、済州四・三文学研究会、2015年6月13日、立命館大学大阪茨木キャンパス

６．研究組織
(1)研究代表者
姜　信和（KANG, Sinhwa）
名古屋大学大学院・人文学研究科・博士研究員
研究者番号：50725083

(2)研究分担者
玄　善允（HYUN, Sunyoon）
大阪経済法科大学・アジア研究所・客員教授
研究者番号：80388636

(3)研究協力者
文　京洙（MUN, Gyongsu）
立命館大学・国際関係学部・特任教授

高　誠晩（KOH, Sungman）
済州大学校（韓国）・人文大学社会学科・教授

梁　永厚（YANG, Yeonghoo）（1930−2017）
大阪済州島研究会会長